

第六二師団野戦病院配属者の行動状況について

(昭和高等女学校)

那覇市崇元寺町(崇元寺橋附近、安里川畔)に在った昭和高等女学校は昭和十九年七月頃、校舎の二棟三教室が武部隊の弾薬倉庫に使用されたので、学校東北方の崇元寺に学校を移したが、十月中旬頃、第六二師団野戦病院から森田大尉、車田中尉、小池中尉、曹長二名が交互に来校し、三四年生(約二二〇名)に対して、毎日午後から衛生予備教育を実施した。

科目の担当は、木林田大尉が内科、車田中尉が瓦斯防護、小池中尉が外科、曹長二名は救急法(人口呼吸のやり方、繃帯の巻き方)であった。

予備教育は昭和二十年一月下旬迄全校で続いたが、一部の者は与那原国民学校で一週間教育をうけ再び归校し、二月上旬頃、令部隊の要請により、首里市赤田所民家に合宿させられ、女子学徒約八〇名は本格的看護教育を三月五日迄受けた(教育の場所は赤田所の山城病院)。

0178

教育は殆んど実地教育で切解手術の立合、指導も、うけ、  
負傷兵に対する加療にも当った。

赤田に合宿時の給与は最初は全部隊から供せられたが、  
其後学徒だけ自炊するようになり、云々糧秣をうけ自炊し  
た。

三月六日、首里高女生も一緒に、正式に軍属（看護婦）として  
全部隊に入隊し、班も組織され、班は八ヶ班に分れ、班長は学  
徒の中から萩原中尉が指名した。昭和高校の学徒は七班と  
八班に所属された。

入隊後は毎朝、早呼（七時）の時、宮城遙拝、軍人勅諭の誦  
読、后、訓示をうけ、日課は衛生兵令様の任務に服し、外出  
も許されなかった。

三月二十二日頃になつてから、家族との面会を許されたので、  
家族と面会に行つたが、艦砲空襲が始まり、帰隊しないの  
もあつて、全部隊には四、名位が残つた。

面会に行つた者の中には、帰隊出来ずに、最寄りの部隊に入つ  
たものもある（例、山三四七五部隊に四名入隊、二名戦死、資料提

供者 佐久間フミ

四月中旬頃（浦添方面の戦いが激しい頃）、部隊は首里高女真和志村識名の壕、赤田の壕の三ヶ所に分れ別個に行動に移った。（昭和-high女は赤田の壕と識名の壕に移動）

○識名の壕に移ったもの、行動。

識名に移ったのは全部隊才八班（学徒班長山川マツ、隊員約二〇名）に所属して、たもので、隊長は木林田大尉（五月二十日頃迄、其後は逢江中尉が交代）、下士官二名、衛生兵一〇名、一五名一般兵一〇名、看護婦七、八名（婦長は与那原出身の城間トシ）、防召兵七、八名と学徒看護婦一〇名であった。任務は患者の収容と治療に當っていた。

首里の戦いが不利となった五月二十六、七日頃、軽傷患者は單獨或は防召兵の付添で後方に移動せしめ、重傷患者約二〇名は五月二十九日隊長、命により、衛生兵がクレゾール原液の注射で処置し、今日晩隊は津嘉山を空して兼城村、武富の壕に一泊、平文仁村米須に移動、全地に一泊、伊原の立

0180

陵にある假壕に移動。

伊原の壕に移つてから患者の收容、治療にも当らないうち、壕前を歩行する患者の要求によつてのみ治療に當つていた。

六月十三日頃空爆で伊原の壕が破壊されたので、部隊は分散の形で部隊全部を收容する壕がなかつたため、転々として壕を移り変り、六月十七日頃、本部が移動して入った米須の壕に移り合流したが、六月十九日晚、兵隊は斬込に出るから、軍属は自由行動をとるようにと、解散命令が出たので、看護婦初め、学徒も各自の行動に移つた。

資料提供者

次元 マサ

(改姓 榎福)

○ 赤田の壕に移つたもの、行動。

才七班(学徒班長 汐平美枝 隊員二名)に所属していたものは、赤田の壕にある全部隊本部勤務となつたが、壕に入

0181

つてから殆んど病室附となった。

首里の總攻壘が失敗後、戦傷患者も増え、戦況も不利となったので、部隊も撤退命令が出た。五月十九日から三日間に亘り三組に分れ、夕刻に軽傷患者（独歩患者）は歩行させ重傷患者は衛生兵が背負い、或は担架に乗せて壕を出發。首里―新川―山川―外間を亘り兼城村武富に後退。生存見込のない患者は後退最後の日の五月二十一日に衛生兵が処置した。

武富に移動後は自然壕（墓地として利用してあったもの）の中には骨壺がいくつもあった。を利用して、首里から一緒に退った患者約二〇〇―三〇〇名位の治療に当った。

病状が悪化して生存見込のない患者は、衛生兵が注射器で処置した。

全地からは衛生材料の補給が困難となり、汚れた繃帯等は学徒看護婦が砲爆下の中を井戸で洗濯して再使用した。

六月三日の日没後、部隊は患者と全員、武富―座波―真壁―伊原を亘り米須に夜中到着。

米須到着後は自然壕に入ったが、同壕には他の部隊も入っていた（石部隊、笑屋支隊の生存者もいた）

全地では收容中の患者の治療のみを当っていたが、軽傷患者は逐次所属部隊に帰したが、六月十日以後、恢復患者は衛生兵と共に斬込に出発したものもいる。

六月十七日に伊原にいた中八班の学徒を含む隊員も本隊に復帰して来た。

六月十八日夜、ひめゆり部隊が米軍の火焰放射器によって壕内で全滅したという情報が出て、更に二十日の未明に米須の壕にも、米軍戦車が攻襲して来るとの情報が出たので、六月十九日の晩、部隊は解散命令が出て、軍属は自由行動をとるようになるといわれ、全日晩は飯も兵隊が焚き、水も海岸にある湧き水を汲んで来て、学徒に対して最後の接待をとして、缺別の言葉を交したのち、学徒を含む軍属は各自の行動に移った。

資料提供者

汐平 美枝  
(所姓 諸見川)

0183